チューリヒ啓蒙主義の系譜とJ.G.ズルツァー（前篇）

－マクデブルク時代の出会いと自己形成－

上　畑　良　信

Ⅰ．はじめに

1720年10月5日、ズルツァーはチューリヒの北方の町ヴィンタートゥールに生まれた。そこで14歳まで地元のラテン語学校に通ったが、両親の急死のためしばらく私教師の世話を受けた。16歳の春を迎えて、後見人の好意により、ペスタロッチーものちに入学するチューリヒの高等教育機関、コレギウム・カロリヌムの神学コースへと進み、そこで古典語のブライティンガー（Breitinger,Johann Jakob 1701-1776）、さらに約半世紀にわたる改革運動の指導者ボードマー（Bodmer,Johann Jakob 1698-1783）と出会うことになる。チューリヒは彼らの活躍によって、ドイツ語圏における「啓蒙精神の重要な発信地」[1]の一つとしてその名を高めつつある時期に当たっていた。学生時代を終えてから後のズルツァーの人生も、この都市の知識人グループの思想的結合とその啓蒙的活動に重要な関わりと役割を担うことになった。のちに検討するように、ボードマーたちにとってズルツァーの存在は、早期においては異国の地で文化的、学問的事情を見聞し、最新の動静を伝える情報収集家にも比すべき役割を果たし、後においては学校の後輩である若き学徒たちの師表として、また彼らを励まし支援する援助者として関わることになった。前者の活動は、また副次的にチューリヒ啓蒙主義の理解者となる第一級の文人・知識人を数多く隣国で見

いだし、書簡の交換や訪問による親密な交流関係を構築することにつながっていく。

この論考では、18世紀の啓蒙都市チューリヒを薫陶の地として頭角を現した啓蒙思想家であり、同時に同郷の教育家にとって重要な先達と目される人物、すなわちヨハン・ゲオルク・ズルツァー（Johann Georg Sulzer,1720-1779）の初期の思想形成期に焦点を当てる。行く先々で幸運な出会いに恵まれるなかで、友愛と敬慕を成長の糧にし続けたこの人物の自己形成の軌跡を、本篇ではチューリヒ出立後の最初の滞在地であるマクデブルク時代の交友関係に照準を当て、彼のライフ・ステージとしては二十代の青年期ないし成人前期に該当する時期を中心に辿ることにする。続篇ではプロイセンのギムナジウム伝統校の教師としてベルリンに移ったのち、彼が郷里の知識人グループとどうつながりを持ち、その交友圏をどう拡げたかという問題視角から、そこで織りなされた人びととの交わりと人間形成上の影響に着目して考察してみたい。

Ⅱ. 新たな出立とマクデブルク時代

1. 学窓の地、啓蒙都市チューリヒ

1730年代後半、ズルツァーが学生であった当時、チューリヒのカロリヌム校ではスイス史の教授ボードマー、ギリシア語およびヘブライ語の教授ブライティンガー、神学の教授ツィマーマン（Zimmermann,Johann Jakob）らが教鞭をとり、チューリヒの啓蒙の運動に寄与し始めていた。とくに1720年代から連名で論文を公表していたボードマーとブライティンガーは、異国の出版文化の事情に通じていて、自らも外国との交流を活発化させ、この地の啓蒙主義を行動的なものにしようとしていた。その時期にズルツァーがカロリヌムに進級できたことは、彼にとってきわめて幸運な巡り合わせであったといえる。

ボードマーたちがチューリヒの若者に対して与えた影響は、単に一時的なものではなく、約半世紀以上に及ぶものとなった。この地の啓蒙の指導者の強みとして、彼らが自前の印刷・出版会社を所有していたことが挙げられる。ボードマーは1734年には彼自身が共同経営者に加わり出版社を創立し、のちにはその甥のコンラート・オーレル（Konrad Orell）が事業を引き継いだ。この会社はズルツァーの初期の著書を引き受けたほか、チューリヒの知識人グループの文筆活動を支援する有力な媒体を提供した[2]。このことは、この地がのちに大陸における啓蒙の一中心都市に加わる諸条件を考慮するうえで、見逃せない事柄の一つになる。

彼らのもっとも初期の教え子であったズルツァーは、その後フリードリヒ２世治世下のプロイセンに若くして渡独し、マクデブルクとベルリンを生活の拠点にして、祖国の啓蒙の先導者たちと、北の隣国における諸邦諸都市に住む啓蒙知識人たちとを結ぶ、いわばパイプ役としての役割を率先して担うことになる。その意味で彼は、ドイツ語圏における啓蒙主義の異国間交流という視座からみても、きわめて重要な位置をしめていたと考えられる。

のちに1760年代に入り、ボードマーを中心に「ヘルヴェチア協会」が結成され、政治的な色彩の濃い都市革新運動が始まったとき、その胎動は一方で道徳主義的な啓蒙活動を共通の基盤とし、また一方で重農主義とルソーの自然法思想に影響を受けて、都市の政治腐敗に対する告発・弾劾にまで先鋭化していく可能性を内に秘めていた。既に拙論で指摘したように[3]、総じてそこではライプニッツやヴォルフの啓蒙理念、神の最善観の影響が色濃く認められ、善と公益を重視し徳の実践を図ろうとする啓蒙主義の理念が強固に意識されていた。他方で、この地ではミルトンのキリスト教文学やシャフツベリーに始まる道徳感覚学派などのイギリスの文芸・哲学思潮への共感もつよく、日々の敬虔なる信仰と心情の醇化（洗練）に基づく人間の道徳形成の思想とを混在させた、独特の啓蒙思想を形成する途上にあったのである。

当地の啓蒙運動を担った「ヘルヴェチア協会」の前身の政治組織は1762年に結成されたが、その「歴史－政治協会」に入会し活動を始めようとしていた世代と、ベルリンで一定の社会的地歩を築いたボードマーの総領弟子ズルツァーとは、1762年夏の帰省以降に再び緊密に結びつきをもつことになった。その世代とはラヴァーター（Lavater,Johann Kaspar)、フュースリ（Füßli,Johann Heinrich)、さらに5歳年少のペスタロッチーへと続くボードマーらの初期の教え子の、その息子らの世代であった[4]。彼らのズルツァーとの交流については、のちに続篇で詳しく論じる。

2．マクデブルクへの転出と商家バッハマンの家族

ドイツ東部内陸地方の一都市マクデブルクは、かつてはスラヴ人の教化を使命として創設された大司教座を中心に発達した商業・宗教都市であった。宗教改革によってルター派へと改宗したのち、ヴェストファーレン条約によってブランデンブルク選帝侯の領邦都市となり、18世紀に入ってからはフリードリヒ1世の治世下でプロイセン王国に属していた。ズルツァーがそこに移り住んだのは、若き王太子フリードリヒが1740年に王位を継いで間もない時期であった。

ズルツァーがこのプロイセン西端の古都市で家庭教師として生活した期間は、1743年から1747年までの5年間である。ここでの生活は婚約者を見いだすきっかけをもたらした事情から、妻の姻戚者の居住地として彼にとっては深い縁のある土地となった。そのため、その後も彼は1750年、1760年、1761年、1764年と、しばしばここを訪れて滞在することになる。さらに、1769年からはまた、ロマネスクの伝統建築様式で知られる聖母修道院ベルゲ・クロスターに付設されていた学校の再建に専門委員として関わり、この地との縁は彼の晩年まで切れることはなかった[5]。

子息たちの家庭教師をズルツァーに委託した富裕な商人ハインリッヒ・ヴィルヘルム・バッハマン（Heinrich Wilhelm Bachmann）は、1730年代半ば頃、ドイツの西部地方プファルツからマクデブルクのエルベ川中

州に移り住み、そこを拠点にライン地方からフランスにおよぶ地域と往来し、絹布や織物の商取引によって財を成した入植者一家であった。居留地名簿によると、エルベ川の中州に移住した日として1734年6月22日が記録されている[6]。翌年には敷地を購入し、居を構えることになった模様である。中州にできた陸地に移住者が住み始めたのは、1722年前後と推定されている。旧市街にあった木材置場を拡張する必要に迫られたとき、中州に材木の搬入場所を求めて開墾の手が入った。木材売買人コンラート・シュルターがそこに住みつき、最初の住人となったとされる。その直後から、神聖ローマ帝国時代の旧選帝候領プファルツからの移植者が目をつけ、コロニーとしての定住地をそこに求めた経緯があったとされる。[7]

さて、新たな転地先でズルツァーを待っていたのは、人間的魅力に溢れた父親と愛すべき子どもらであった。チューリヒの友人であり、のちにズルツァーの伝記を著したヒルツェル（Hirzel,J.C.）が共通の友人グライムに宛てた書簡には、友人の筆を通して、商家の当主の印象が書き記されている。主人バッハマンは「ドイツやフランスの書物だけでなく、古代の諸作品の翻訳書を熱心に読書することを通じて、美と善への繊細な趣味を身につけた最良の人物」であり、「特別の功労によって町全体から愛されている素晴らしい人間」[8]であると、この人物が地元で受けていた評判をなぞりつつ記している。

ズルツァーが身を寄せた頃には、この商家の主人は、すでにマクデブルクで最も声望のある市民の一人であったようだ。活動的で進取の気象に富むバッハマンは、教会への寄進や貧民に対する慈善によって人びとの信望を集めるとともに、多くの蔵書を持つ教養人でもあり、地方新聞の記事によると、「中州税関通り19」という一区画に立派な庭園と屋敷を構えた邸宅を有し、18世紀の中葉の当時、そこはマクデブルクにおける文化的中心地になったと記録されている[9]。

その謂れは、主として、この邸宅を拠点として、詩・文学や音楽を愛好する同好の士による知識人クラブが組織されたことによる。その同好会は、

毎週水曜日に会合をもっていたことから「水曜会」（Mittwochsgesellschaft）と名づけられた。当主バッハマンの晩年の1740年代に始まり、18世紀末葉まで存続したとされるこのクラブは、とくに1750年代から60年代にかけて才能に富む人物をメンバーに擁し、バッハマンの屋敷とその庭園の華やかな印象を決定づけた。クロプシュトック（Klopstock, Friedrich Gottlieb 1724～1803）が1750年にバッハマン邸に滞在したときには、その中州と庭園についての印象を彼は「幸福の島」と記しており[10]、その当時、同邸はこの地方の人々によって「ミューズの殿堂」と呼ばれていたほどであった。

ところで、このバッハマン家でズルツァーに委ねられたのは、二人の子どもたちであった。1930年代の後半にバッハマン夫妻は三人の男児を授かったが、長男は二歳で夭折した。残された二人の子息のために、商家バッハマンは、チューリヒで商人を養成する学校を経営していた校長シュルテスに、家庭教師の斡旋を依頼した。運よくそこへトゥールのヴィデン城で家庭教師をしており、著述にも取り組む向学心のある23歳の青年がいるとの吉報がもたらされたことが、この若者の運命を決定づけたのであった。

異国からの誘いを受け入れ、故国を離れたズルツァーを待っていたのは、良い躾を受けた少年たちであった。向上心に富む青年私教師にとっては、すべてにおいてこの上なく恵まれた境遇であった。彼は子どもらの興味を多面的に開発しながら、徳と教養をつけさせるという課題に向けて、熱意に燃えて取り組むことになった。子どもたちを教えることに何の困難も生じなかった、と当時を回顧してズルツァーは書いている[11]。その息子たちのうち、父と同じ名を持つ三男ハインリッヒ・ヴィルヘルムが、長じて親の事業と文芸的活動を受け継ぐことになった。

三男ハインリッヒはズルツァーの薫陶を受け、立派に成人して家の商売を継ぐと同時に、マクデブルクにおける知識人と文化愛好者のクラブである「水曜会」の中心メンバーに成長していく。父が興した商家を大きな社屋を持つ商会へと発展させ、この地の文人・芸術家の後援者として、また

立派な蔵書を持つ知識人として、地方名士の名鑑に登録されるほどになったとされる。彼の蔵書室は、父から受け継いだものであったが、ドイツと外国の文学のほぼ完全な蒐集を誇るものであり、クロプシュトック関係では外国の翻訳本をすべて集めていたといわれる[12]。

あわせて次のことも考慮するなら、家庭教師としてのズルツァーは、教え子の知的陶冶には見事に成功したという評価がなされるであろう。青年教師の訓蒙を受けて自然探究に対する興味を吹き込まれた少年は、成人してのちも自然研究に従事し、ジルバーシュラーク（Silberschlag, Georg Christoph）と協力して、金星における空気の存在を発見するにいたった。1761年の彼の功績は、天体研究の歴史にながくその名をとどめることになった[13]。

Ⅲ．新たな出会いと交友圏の拡大

１．クロプシュトックと「水曜会」の主要メンバー

このマクデブルクの滞在時代に、ズルツァーがどのような人びとと出会い、親交を深めることになったかについて、とりわけ彼の人生につよい影響を及ぼしたと目される人物たちとの出会いと、その交友圏の拡がりをここで探っておきたい。

新天地に移り住んだズルツァーにとって、当主バッハマンの友人の一人に牧師ザック（Sack,August Friedrich Wilhelm）がいたことは、まずは決定的に幸運なことであった。バッハマン家で知り会えたこの牧師は、その後生涯にわたり年少の友人のよき理解者となり、支援者となったからである。伝記作家によれば、ズルツァーのギムナジウムへの奉職のために周旋の労をとったのも、ベルリン王立科学アカデミーの会員に推挙する活動の中心にいたのもザック牧師であったとされる[14]。

ザックは1731年にマクデブルクの改革派教区の伝道師を委任されて以

来、この都市とつながりを持つことになった。彼はフランクフルト大学で神学を修めたあと、オランダに職を求めて渡り、そこで母親とともに滞在していたヘッセン=ホムブルクの皇太子の教育係を務めたという経歴の持ち主であった。教養と学識に富み、その説教には定評があったという[15]。

1761年にズルツァーが友人に伝えた言葉によって、信望をあつめたその人柄についての証言を引いておこう。「説教師ザックは公の職務の疲れを人と交わって癒すことができればと考え、バッハマン家とコイゼンホーフ家を訪れた。そこに彼は、偉大な自然に導かれて真に誠実な生き方をしている人びとを見いだした[16]。人びとはザックと啓発的な交際を結ぶことにより、宗教によって人間本性がその本当の偉大さにまで高められるという、生きた宗教的知恵に気づくことになった」[17]。この引用句には、バッハマン家とその親族の新教的な —— だが宗教的にみて主情的で人格主義的な —— 信仰態度が端的に表現されている。

やがてザックは、1738年になるとマクデブルクの改革派教会の役員に選出された。そしてその教区からの具申によって、1740年以後からはベルリンの宮廷内教会の説教師にも就任していた。こうした事情でズルツァーは、バッハマン家に入ると同時に、帝都ベルリンとマクデブルクを行き来する第一級の知識人と邂逅することができたのである。後述するシュパルディンクとともに、彼はズルツァーの今後の人生に大変大きな役割を果たす貴重な理解者の一人となったのである。

第二に、1740年代の後半になると、その交友圏の中心に、若きクロプシュトックが加わった。1748年から詩作を開始した『メシアス』などによって、彼が近代ドイツ詩の開祖となったことはよく知られている。頌歌といわれる初期の詩は、自然美や友情や恋愛のすばらしさを詠いあげ、神の栄光を情熱的に称えて、ゲーテやシラーの先駆けとなった。このときまだ出版していなかった『メシアス』の最初の頌歌が水曜会で朗読され、人々の感銘を呼び起こしたといわれる[18]。たびたび彼は、中州を訪れ、詩作のためにバッハマン邸に逗留した。1750年にはこの地に長期日滞在し、この年

の書簡のなかで、彼はこの地を「幸福の島」と呼んだのだった。1753年にバッハマンが亡くなったときには、「早く旅立った人びとへ」という詩を故人に捧げたことが知られている。また1764年に数週間ここに滞在したときに、この地で『メシアス』の「アプバドンナ」の最も美しい章句を詩作したとされる[19]。この高名な詩人は、ズルツァーを仲だちとしてボードマーの親しい友人になることで、チューリヒとドイツの知識人の交流史に確かな足跡を残すことになった。そのきっかけは、クロプシュトックを伴ってズルツァーがボードマーを訪ねた1750年の帰省旅行に始まるが、委細については次の機会に論じる。

第三に、年長の友人グライム（Gleim,Johann Wilhelm Ludewig 1719～1803）とズルツァーがこの地で知り合えたことも、彼の成長に大きな刺激と幸運をもたらした。グライムはのちにドイツ啓蒙主義を代表する詩人で著作家となった人物である。ハレでの勉学生活を終えたあと、1747年にハルバーシュタットの教会参事会秘書の職に就くまで居所の定まらなかったグライムは、商人であった兄ヴィルヘルムを頼って一時期マクデブルクに身を寄せていた。1743年の暮れに同地に着いたズルツァーは翌年にはもうグライムと出会う機会をもった。グライムは兄を通して、地元の音楽家をはじめとして、バッハマン家に集う文化愛好者たちと接触していたが、ズルツァー自身の書簡では、二人が知り合う直接のきっかけは、両者がたまたまベルリンに居るときにザックが間に入り引き合わせたのだという[20]。ヴィーレらの郷土史研究によれば[21]、グライムはその後、ズルツァーや音楽家ロレ（Rolle,Johann Heinrich）の友人として、たびたびこの地に滞在をしたことがわかっており、向上心の強い青年ズルツァーにとって詩人の存在は、その教養精神と文芸趣味において相互に啓発し合う関係を結ぶ友人の一人となった。

第四に、グライムを通じてズルツァーはまた、ハレの近村に住む地方詩人ランゲ（Lange,Sam.Gotthold）の知己をうることになった。ランゲは1737年以来、ハレに向かう街道の途中に位置するザーレ河畔のラウプリ

ンゲンの牧師であったが、自らも詩作をおこない、詩人としてもその名はかなり知られていた。近隣であることの地理的な機縁もあって、ハレ大学のマイアー教授らと接触をもち、文芸運動の熱心な共鳴者となっていた。当然彼は思想的にはヴォルフ学徒であるマイアーとの交流のなかで、ライプニッツ・ヴォルフ的な形而上学の共感者であったし、他方でこの詩人は彼の妻とともに、チュリーヒのボードマーらの文芸批評の愛読者でもあった。彼らが集う水曜会に、参加者がともに共有する「詩と友情に対する情熱」をいち早く持ち込んだ人物の一人であったとされる[22]。

ズルツァーがここで親交を結んだ人物には、以上に挙げた水曜会の草創期のメンバーたち、すなわちベルリンの宮廷説教師ザック、近隣の町ハルバーシュタットの才人グライム、ラウプリンゲンの地方詩人ランゲ、旅の定宿にバッハマン屋敷を利用していたクロプシュトックのほかにも、宮廷の庇護を受けてのちに国外にも名が知られた女流詩人のカルシュ（Karsch, Anna Luisa）、宮廷顧問官ケプケン（Köpken,Friedrich von）、市庁舎に隣接するヨハニス教会のオルガン奏者で楽団指揮者ヨハン・ハインリッヒ・ロレとその父等[23]がいて、彼らは盛んにバッハマン家に出入りし、「水曜会」の陣容を構成していた。その人脈は多彩であり、これらの理知的で審美的才能に秀でた一流の人々が、当時プロイセン西端に位置する地方都市マクデブルクの文化活動に活気を与えていたのだった。

ズルツァー自身も、水曜会に連なるこれらの友人と知己をえてから、詩文学の世界に一層興味をかきたてられ惹き込まれていった。熱心に読書をし、詩作にも挑戦し、1745年３月20日付の書簡では「春」と題する詩をグライムに贈るまで、詩作の腕もあげていた[24]。

スイスの東部地方から来た若き移住者を取り囲むドイツの人びとが、チューリヒの啓蒙の精神を体現していた一青年をどのように好意的に受け入れたかを、郷里の友人で伝記作家のヒルツェルが伝えてくれている。善意に富んだ人たちは、彼のなかに自分たちと「共通の趣味」を見いだし、「情愛に満ちた友情」を確信できたという。友人はこう記している。

「人びとは自分たちの仲間のなかに、彼らが尊敬するボードマーの同国人がいるのを喜んで迎えました。ズルツァーが精神と魂においてボードマーに似ていることが、彼らを喜ばす結果となったのです。思慮に富んだ自然研究家であり哲学者であるこの男が、自分たちときわめてよく似た言語で語るのを聞くと不思議な思いがしましたし、まさに火のような情熱をもって、彼が美的判断力の向上に興味を示すのを見ることは、彼らにとって本当のこととは信じられず、実に不思議に思われたのでした。」[25)]

そしてヒルツェルは、そこに次のような伝記作家らしい敷衍した評価をさらに加えている。「マクデブルクは、ズルツァーの生涯のうえで決して消えることのなかった、芸術の魅力に対する傾倒へ熱狂をもって彼を導き入れたということにおいて、彼自身の性格を決定づけたと思われる場所でありました。そして彼にこの魅力を発見させたのは、他でもなくそこでの交友仲間であったのです」、と。[26)]

このようにして、幸運が幾重にも同居したこの地で、ズルツァーが親交を見いだした仲間のなかに、その後の人生を豊かにしてくれる一人の愛すべき異性の存在があった。

2．当主バッハマンの姪カタリーナ

1745年5月にズルツァーは、マクデブルクとラウプリンゲンを往き来しているが、このとき彼にとって人生の転機となるある出会いがあった[27)]。当時、彼はある月刊誌を出版する計画について協力を求められ、一編集者として啓蒙的な詩文学の論稿を寄せる約束をしていた。印刷・刊行はマクデブルクが予定されていた。

ハレに向かう街道の途上にあるラウプリンゲンには、この地方の詩文学の文芸活動に影響をもっていたランゲ牧師が住んでおり、彼を中心に詩・文学の知識人たちの交友圏が形づくられていた。メンバーの一人に、上級地方裁判所の役人ゲルメルスハウゼンの名もあった。上述したように、地方の文学青年、作家、音楽家たちのよき理解者で、信望を集めていた商人

バッハマンの屋敷は、文芸愛好者たちのマクデブルクでの集会所を兼ねていたが、両者の交友圏が出会い、それが一つにつながったとき、偶然にもそのなかに二人の若き淑女が含まれていた。

一人は、その姉がベルリンで教会役員をしている地元教会のシュヴァルツ婦人であり、もう一人は近くに居住していた商家バッハマンの姪にあたるカタリーナ（Catharina Wilhelmine Keusenhof）であった[28]。二人はランゲ牧師を中心とした詩文学を愛好するサロン活動の熱心な参加者としてズルツァーに紹介され、ほどなくズルツァーは詩の鑑賞の手ほどきを請われることになった。近くの町ハルバーシュタットに住む友人グライムの詩を娘たちに朗読してやることから、将来結婚へと発展する関係が芽生えたのである。

こうしてズルツァーと文学少女との純粋で真面目な友情関係が始まった。いつしかカタリーナが魅力的な女性に成長するにつれ、この若い愛すべき娘は男性にとって恋情の対象へと変わった。1746年３月のグライムへの私信では、ある「詩的な女性」にいま恋していることを彼は率直に告白している[29]。だが、この時期のズルツァーは、思い切って愛のことばを打ち明けるのを踏みとどまった。女性が最良の友達としての関係を切望していることが察せられたからである。

それから一年が経過した1747年の夏に、商家の主人バッハマンは彼の二人の息子と姪カタリーナを連れて、西部諸邦の一つで父方の親戚が住むベルク公国のランゲンベルクへと旅立つことになった。ズルツァーもこのときかねてからの旅行を決行し、一家の旅に途中まで付き添い同行した。ズルツァーの旅の目的は、ベルリンでの求職活動にあった。にもかかわらず、遠く回り道をしてブラウンシュバイクまで家族の旅行に付き合った。彼の心にある決意があったからである。

この旅の途上、ズルツァーは学校教師の求職活動に希望をつなぎながら、胸のうちを意中のひとに打ち明けてしまう。その返事は期待を裏切り、結婚しない生き方を選ぶという実につれないものであった。彼の求愛は変わ

らぬ友情を約束するという予想外の結末に終わってしまう。文通によって友情を続けることが彼女側からの提案であった[30]。幸いなことに、一方の生活の基盤を固める計画は首尾よく運び、同年秋の10月、ベルリンのヨアヒムシュタール・ギムナジウムへの奉職が正式に決定した。未練を残しながらズルツァーはベルリンへと旅立つ羽目になった。最終的にカタリーナが求婚を許諾したのは、彼がクロプシュトックを伴いスイスに帰国する1750年になってからである。その年の12月17日に二人は挙式をあげた。[31]

カタリーナとの生活は結婚をしてほぼ十年で終焉を迎える運命にあった。二人を結びつけたマクデブルクは、ズルツァーにとって「生涯を通して最もすばらしい時代」であった、とのちに彼は回想している[32]。1760年の春に、妻は二人の娘を残し、突然の病に冒されて他界した。

Ⅳ．啓蒙神学者シュパルディンクへの書信

以上のような知的で教養ある人びととの出会いに恵まれたズルツァーは、新天地であらためて詩・文学や哲学的探究への情熱を掻き立てられた。祖国を離れたことで、逆に一層チューリヒの教授たちへの共感を強めることになったのである。彼はバッハマンの居宅で、ドイツ詩学の先人オーピッツ（Opitz, Martin）や、ベルン出身の代表的詩人ハラー（Haller, Albrecht von）に親しむとともに、ボードマーそしてブライティンガーの文化評論を熱心に読み耽った。ボードマーらが「批判的」評論のなかで「神の最善観」を純粋に主張するその見解は、文芸の脱魔術化を急ぐドイツの啓蒙主義者たち、とりわけゴットシェート（Gottsched, J. C.）と激しい対立を呼び起こしていた。ズルツァーはチュリーヒを旅立つ前に、ドイツで知りえた新作評論について詳細に報告することをボードマーたちに約束していた[33]。それは活発な書状の交換によって果たされることになる。その一部はのちに編集され1804年に公刊されたが、その書はドイツ近代文

化史と啓蒙主義に関する貴重な証言記録と言えるものになっている[34]。

ズルツァーの書信をも収載したその「書簡集」（ケルテ編集）を繙くと、ズルツァーの交友圏のなかに、マクデブルク滞在のこの時期に、ある特筆すべき人物が現われたことがわかる。その人とは、北方の小都市バルトに牧師職をもつ啓蒙神学者ヨハン・ヨアヒム・シュパルディンク（Johann Joachim Spalding）であった。

彼はグライフスヴァルトとロストックの高等教育機関で学んだのち、啓蒙主義の時代潮流のなかで牧師という宗教者の立場から、イギリス哲学に思想上の拠り所を求めようとしていた人物である。彼はズルツァーが親しんできたチューリヒの学風に似かよった問題関心をもち、シャフツベリーの調和的人間観や、彼を祖としてハチスンにまで受け継がれていく利他主義的な道徳哲学につよい共感を示していた。

ズルツァーがシュパルディンクと結びつく機縁をもちえたのは、直接にはグライムの仲介があったからであった。そのことは1746年７月15日付の一書簡が伝えている。グライムがシュパルディンクと知り合ったとき、ズルツァーは直ちにグライム宛てに書信を送り祝福を述べた。そのなかで、ズルツァーは自らの学究的興味からシャフツベリーに話題を転じ、この人物が道徳論に関して立派な見識を有していること、ギリシアの風刺散文作家ルキアノスに似て、機知と思慮に富み卓越していることを挙げ、大変尊敬に値する人物であると称賛の言葉を書き記す。そして最後に、シュパルデンクがシャフツベリーの『道徳論』のような著書の翻訳に着手し、当地ドイツへの「善い趣味」の受容に寄与してくれるように願う、と希望をつけ加えている[35]。

このときグライムがシュパルデンクの友人になったことは、精力的に文筆活動を始めかけていたズルツァーにとって願ってもないことであった。彼の胸中に自著の批評をシュパルディンクに委ねるという願望が大きく膨らんでいった。さっそく翌月になってズルツァーは、シュパルデンクが自分の出版用の原稿の批評をしてくれないかと、グライムに取り次いでくれ

るように求め始める[36]。ある書信では、彼はボードマーからの書簡に触れたあとで、こう書いている。

「私の『哲学会話』の“初めに”[37]を、シュパルディンク氏とあなたにお送りするため、ここに同封します。あなた方が、遠慮なく私を批判してくだされば、くださるほど、それだけ私たちの結びつきは強くなります。これはお愛想と受けとらないようにお願いします。私たち二人の間には、いささかの不調和も生まれないことでしょう。互いに批評し合ったことが理由で、あなたとランゲさんの間に不都合が何も生じなかったのと同じことです。そのことを私は請け合います」[38]。（1746年10月20日付書簡）

この書信の一年前に、ズルツァーは彼の処女作ともいえる書『自然の作品に関する若干の道徳的考察の試論』（初版）をベルリンで出版していた。ケルテ編集「書簡」では直接書名を挙げて言及した箇所は認められないにせよ、彼がこの頃第三者の批評をもっとも求めたかったのは、この小著であったはずである。

この刊行書は彼がマクデブルクに赴く前に書きため、チューリヒの定期雑誌にすでに掲載されていた論稿３篇と、転地先のマクデブルクで書き起した３篇を集め、バッハマン家で知り合えたザックの推薦文の「序文」を付して、ベルリンの出版業者フリードリヒ・ニコライの書店で出版したものであった。そのなかでズルツァーは、自然の学問的認識の主要な目的が、他でもなく人間形成そのものへの寄与にある、と啓蒙の学徒らしい見解を表明していた。すなわち、自然的世界を対象とする学問を通じて真に美的で偉大な観念に触れることで、人間は「悟性」を強めるとともに、精神を「崇高な感情」で満たすことができること、そしてそうした情操の育成がひいては「礼儀正しく、情愛にみちた道徳」の基礎になる、というのである[39]。ライプニッツ・ヴォルフ的形而上学の用語を多用するこうした主張は、彼の学問的出自であるチューリヒの学者たち、つまりカロリヌム校の教授や自然研究家ゲスナー（Geßner,Johannes）らの見解を色濃く反映したものとみなすことができる。

この『試論』はのちにフランス語の訳書が出版され、それが数版を重ね評判をとることになるが、その予感が彼にあったためか、すぐにズルツァーはその再版を計画し、新たに幾つかの主題に取り組むことになった。そのなかに、数篇の哲学的論考が含まれていた。

それらを念頭において、批評を懇請する目的で彼が次に書いた書状に、1747年３月４日付の次のものが認められる。

「ところで、そう遅くならないうちに彼の批評を私の許に書き送って下さるように、どうかシュパルディンク氏に促してください。というのは、二つの最初の章にとどまらず、作品全体について彼が批評してくださるなら、私は執筆を進めながら、そちらも書き改めることができると思うからです。私はいま『自然史研究の優美と有用性に関する談論（“Discours sur l'élégance et l'utilité de l'étude de l'histoire naturelle”）』[40] に取り組んでいます。それはフォルメイ氏による拙著『道徳的考察』のフランス語訳に続くものです。あわせて私の『哲学談論』についても批評して下さるよう切に希望いたします。」（1747年３月４日付書簡）[41]

この頃すでに彼は、ザックの仲介でベルリン王立科学アカデミーの常任の秘書であるフォルメイ（Formey, J.H.S.）と知り合い、好意的な処遇を受けていたことが文面から推察される。それでも、最終的に仏語訳の『道徳的考察』が公表されるには、1754年まで待たねばならなかった。

ところで、この書簡に言う「自然史研究」の論文は、最終的に『自然美に関する談論』（Unterredung über die Schönheit der Natur）という表題の下で仕上げられ、1750年にベルリンで出版される『道徳的考察試論』の第二版に収録されたという経緯をもつ。

この時期に、彼は改めてボードマーやブライティンガーの文学評論に没頭し、自然秩序の崇高さや詩・文学の意義について考察をめぐらしていた。その成果は、ボードマーへの献辞を記して上記の『自然美に関する談論』として仕上げられた。「私の哲学談論」はその論文を指すとみるのがもっとも自然な解釈と思われるが、他方で別の解釈の可能性が消えるわけでは

ない。この時期に彼は『自然美に関する談論』と並行して、二つの著述上の主題に取り組み、それを1750年にベルリンで印刷に付した。その作品は1773年の『哲学選集』に収録されておらず内容の全容はつかめないが、その表題は『博識の世界からの批判的報告』『無二の親友ダモン、すなわちプラトニック・ラブ』であった[42]。書信にいう『哲学会話』『哲学談論』はそれらを指している可能性があることも想定しておきたい。

いずれにせよ、ズルツァーはシュパルディンクやグライムに、この時期に彼が取り組んでいた「哲学的」内容の論稿について批評を求めようとしていた。その批評の再度の催促は、翌月の書信にさっそく認められる。

「私の『哲学談論』について、あなたとあなたの友人から批評をいただき、どうかそれを有効に活用させていただきたいのです。あなたとシュパルディンク氏のお助けがなければ、この小著は日の目を見ることがないでしょう。推敲しだい順を追ってあなたにお送りします。」[43]（1747年4月29日付グライム宛て書簡）

彼の重ねての懇願が適えられ、その批評が届いたかどうかは、遺された資料からは詳らかにできない。彼はこの『自然美に関する談論』のなかで、山川草木や動・植物についての博物学的な基本知識を概説しながら、朝の美しさ、風景美、花の香り、鳥の囀りなどを例にとり、自然界の多様性と調和と不可思議さへの感動を簡潔に描出してみせる。そして自然界の造形美や生命の神秘さに、「道徳的考察」の視点から特別の意味を求め、とりわけ人間が自然の秩序や美しさに触れることで、快苦の激情や不安な情緒から解放され、調和のとれた心的均衡へと導かれることをそれは強調している[44]。すなわち、この小著は、詩作をはじめとする人間の文学的、芸術的な行為を啓蒙主義の学徒なりに意欲的に意味づけようとする作品であったといえる。

この4月の同じ日に彼はグライムに書簡を発送するだけでなく、シュパルディンク宛てにも書状を書き送った。シュパルディンクがベルリンを去るという報をすでに得ていたらしく、すべての期待が急速に凋んでいくの

を感じて、彼は次のような深刻な胸の内を表出した手紙を書いた。そこには、当時敬慕してやまなかった人物に対するズルツァーの一途な心情が率直に吐露されており、少し長くなるが厭わずに引用しておく。

「あなたの別れの手紙[45]が私にもたらした驚きと悲しみから、私はまだ立ち直れていません。初めの一行を目にして、私の耳に突然の雷鳴が響いたかのようでした。父親が死んだことをその息子に知らせるのに、人は気を遣って徐々に告げていくものですが、このような悲しい知らせを伝えるのに、どうしてあなたは心の準備をさせてくれなかったのでしょうか。私はきわめて心根が優しいたちなので、そのような思いがけない一撃を受けて、どうしようもなく気が滅入ってしまい、長く憂欝な気持ちにとらわれたままです。あなたの退去の知らせを聞いて、私は涙を枯らしてしまいました。そう言っては、はたして言いすぎでしょうか。私がいかに深くあなたを愛し、尊敬申しあげているかを、こうしたことから少なくともお判りいただけるでしょう。ベルリンであなたに御目に掛かれなかったこと、そしてそのことで、私が望むようなかたちで、あなたとの友情を深められるという希望を失ってしまったことは、私にとっては途方もない痛手です。ほんの二、三の手紙だけで知り合った人、そのさい面識を乞おうとする特別な意図もなしに書かれた二・三ボーゲンの原稿のみによって認識していただけただけの人間、あなたにとって私はそういう存在なのです。それだのに、そういう者に真正の信頼をおいて友好をお許しになると期待するとは。さらに、本当にあなたを敬愛していて、二人とお目に掛かれないような人物であると認めていただくことを期待するとは。そもそも、そういうことがありうるはずはなかったのです。私はこのような教訓噺を作話して、自らを慰めてはいられません。私にはあなたを尊敬し、愛する理由が実に多くあるのです。

それだから、私は希望のすべてを失ったわけではありません。なぜなら、あなたがこの世から居なくなったわけではないのですから。そうであるかぎり、いつかはあなたに会えると希望を持ち続けます。ベルリンを再び訪

れることはないというあなたの決意が固いのであれば、あなたがいずこかに長く留まるおつもりなら、そこにあなたを訪ねたいと、私は決意を固めております。 —— あなたの滞在先、ならびにあなたの近況をお知らせくださる友情だけでも私にお示しください。そして、今後私の胸中全体を、少なくとも書き物の手段で、あなたに打ち明けることに私が甘美な愉しみを見いだそうとしても、どうぞお許しください。」[46]（1747年4月29日付シュパルディンク宛て書簡）

彼のこの時期の懇願が直ちに適えられたかどうかは、収集した資料からは詳らかではない。だが、やがてベルリンに移住したザック牧師も含めて、しだいに彼らが親交を深めていったことは論を俟たない。

この書簡より数えて15年後に、シュパルディンクはズルツァーの依頼によりチューリヒの若者たち —— 彼らの名は、ペスタロッチーの年長の友人であるラヴァーター、フュースリ、それにヘス（Heß,Felix）であった —— を自分の居宅に招き入れ、9カ月もの間、教養旅行の客人として世話をする巡り合わせとなる。

その翌年の1763年、シュパルディンクがベルリンにある新教教会の上級役員会のメンーバーとして招聘されてから、ズルツァーとその友人はより頻繁に接触し、のちに「ベルリン水曜会」（Berliner Mittwochsgesellschaft）へと発展していくベルリンの啓蒙主義者グループの、ともに重要な構成員となるのである[47]。

（前篇　了）

註

1) Widmer,Sigmund: *Illustrierte Geschichte der Schweiz*, 2.Aufl., Zürich 1971,S.271.

2) Weigl,Engelhard: *Schauplätze der deutschen Aufklärung,Ein Städterundgang*, Hamburg 1997,S.23.（エンゲルハルト・ヴァイグル著、三島憲一・宮田敦子訳『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年、22-23頁）。ボードマ

ーは1727年には既に自前の印刷所をもっていたが、1741年に甥のコンラート・オーレル（Conrad Orell）と共同で出版社を設立した。教育を主題とした著作の最初の版（Versuch einiger vernünftigen Gedanken von der Auferziehung und Unterweisung der Kinder,1745）と、修正改訂版（Versuch von der Erziehung und Unterweisung der Kinder,1748）をはじめとする、ズルツァーの初期の著作のいくつかは、このオーレル社が出版を引き受けた。

3) 拙論「J.G.ズルツァーからJ.H.ペスタロッチーへのスイス教育思想の生成と展開(1)」『長崎県立大学論集』第33巻、第２号、長崎県立大学学術研究会、1999年、123 - 125頁を参照してほしい。

4) Liedtke,Max: *Johann Heinrich Pestalozzi*, Hamburg 1968,S.20f. ラヴァーターらがドイツの教養旅行から帰ってきたのは1764年の３月26日であったが、ペスタロッチーは同年５月９日にヘルヴェチア協会の前身の組織である「歴史 - 政治協会」の会員になった。

5) Förster,Uwe:*Unterricht und Erziehung an der Magdeburger Pädagogien zwischen 1775 und 1824*,Frankfurt a.M.1998,S.61.

6) Der Neue Weg, regionale Tageszeitung, Hrsg.von CDU, Halle und Magdeburg, 02.08.1991,S.15. バッハマン家が同地に移住した年については1734年とするもののほか、1733年と記載している記事もある。前者は上記文献 Der Neue Weg,02.08.1991. であり、後者の一例は Volksstimme Magdeburg, regionale Tageszeitung, von der Magdeburger Verlags- und Druckhaus GmbH erschienen, 11.11.1992,S.12 である。

7) Der Neue Weg,02.08.1991,S.15.

8) Hirzel,J.C.:*Hirzel an Gleim über Sulzer den Weltweisen*,Bd.1, Zürich und Winterthur 1779,S.65.

9) Der Neue Weg,02.08.1991,S.15.

10) Ebenda

11) Hilzel,J.C.: a.a.O.,S.65.

12) Volksstimme Magdeburg,11.11.1992,S.12.

13) Wiehle,M.u.a.: *Magdeburger Persönlichkeiten*,Hrsg.v. Magistrat der Stadt Magdeburg Kulturdezernat, Magdeburg 1993,S.46f.

14) *Johann Georg Sulzers Pädagogischen Schriften*,mit Einleitung und Anmerkungen von Willibald Klinke,Zürich 1922,S.9.

15) Blätter für Handel,Gewerbe und sociales Leben,Beiblatt zur Magdeburgischen Zeitung, No.32,den 6.August 1877,S.250.（マクデブルク市・市文書史料室所蔵）

16) Vgl. Pestalozzi,J.H.:*Sämtliche Werke,Krit.Ausgabe*,Bd.1, Berlin

1927,S.266. 人間が「自然の道」(Bahn der Natur) や「自然の秩序」(Ordnung der Natur) に付き随うなら、真の幸福と人生の真理へ容易に導かれる、とペスタロッチーが初期著作の『隠者の夕暮』などにおいて繰り返し主張したのと同一の語用を、ここに認めることができる。

17) Hirzel,J.C.:a.a.O.,S.80.コイゼンホーフ家の主人は同時期にベルク公国から移ってきた商人で、バッハマンの姉妹と結婚したため、バッハマン家とは姻戚関係にあった。そのバッハマンの親族の娘に、ズルツァーは求愛することになり、のちに結婚した。

18) Der Neue Weg,02.08.1991,S.15.

19) Ebenda.バッハマンの庭園屋敷は、18世紀末には人出にわたり、1912年までその原形を留めていた。クロプシュトックが1764年に植樹した褐色ブナが最後まで残ったという。1900年以降は詩人の名のプレートを設け、胸像のレリーフを飾り名所になったとされる。

20) Blätter,S.251.

21) Wiehle,M.: a.a.O.,S.4. ズルツァーが同地に住んだ1747年だけでなく、またそれ以後のグライムの滞在機会として1750年,1755年,1759年,1762年,1763年,1779年が認められる。

22) Blätter,S.251.

23) Ebenda.

24) *Briefe der Schweizer Bodmer,Sulzer,Geßner.* Aus Gleims literarischem Nachlasse,Hrsg.v.Körte,W.,Zürich 1804,S.10.

25) Hirzel,J.C.,a.a.O.,S.80.

26) ditto,S.75.

27) Blätter,S.257.

28) ditto,S.259.

29) *Briefe der Schweizer*,S.34.

30) Blätter, S.259.

31) ditto,S.257.

32) Vgl. Blätter,S.258.

33) *Johann Georg Sulzer's Lebensbeschreibung.*Aus der Handschrift abgedruckt, mit Anmerkungen von J.B.Metian und F.Nicolai,Berlin und Stettin 1809,S.23.

34) 当時若い啓蒙知識人を支援していたチューリヒのボードマーは、ズルツァーだけでなく、グライムやクロプシュトックらの北部ドイツの文化・教養人たちとも頻繁に書簡を交換した。その書信はのちにケルテによって編集され、1804年に刊行された。上掲書、*Briefe der Schweizer, Bodmer, Sulzer, Geßner.* Aus Gleims literarischem Nachlasse, Hrsg.v. Körte,W.,Zürich 1804である。

35) *Briefe der Schweizer,* S.35f.

36) ditto,S.41.

37) これがどの論文のどの部分を指すかは、筆者の現在の蒐集資料からははっきりと確定しえない。前後の書簡から推定すると、1750年にベルリンで出版された『道徳的考察試論』（第二版）に収録されている『自然美に関する談論』の14頁分の「序文」を指すと考えるのが順当であろう。

38) *Briefe der Schweizer*, S.41f.

39) Vgl.Sulzer,J.G.:*Versuch einiger moralischen Betrachtungen über die Werke der Natur*,Berlin 1745.

40) ベルリン王立科学アカデミーの常任の秘書のフォルメイ（Formey,J. H.S.）による『道徳的考察』のフランス語訳は、ライデンより1754年に出版された。

41) Briefe der Schweizer, S.44. この書信のなかにある『優美と有用性に関する談論』は、最終的に『自然美に関する談論』(Unterredung über die Schönheit der Natur）という表題が与えられ、『道徳的考察試論』の第二版（下掲）に収録された。この『試論』に収録された『自然美に関する談論』には「思考の最高の対象」「自然が精神と心の学校である」他、の主題が含まれていた。

42) Vgl.*Chronologisches Verzeichnis der sämtlichen Schriften des Herrn Johann George Sulzers*.In: Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften,zweiter Teil,Leipzig 1781.

43) *Briefe der Schweizer*, S.56.

44) Vgl.Sulzer,J.G.:*Unterredungen über die Schönheit der Natur, nebst derselben moralischen Betrachtungen über besondere Gegenstände der Naturlehre*, 2.Aufl.,Berlin 1779.

45) ここでは「別れの便り」というより、ベルリンを離れる強い決意を込めて „Abschiedsbrief“ と書き記している。

46) *Briefe der Schweizer*, S.57f.

47) Vgl.Förster,U.:a.a.O.,S.61. ズルツァーが彼の晩年の1770年に、請われてマクデブルクの学校改革に関わったとき、委員会の構成委員にザックとシュパルディンクも名を連ねることになった。それはズルツァーのつよい意思によるものであり、彼らの親密な結びつきと深い交わりがこの事実からも伺える。

参考文献

Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften,erster Teil,Leipzig 1773.

Johann Georg Sulzers Versuch einiger moralischen Betrachtungen über die Werke der Natur,nebst einer Vorrede von A.F.W.Sack, Berlin 1745.

Sulzer,J.G.:*Versuch einiger moralischen Betrachtungen über die Werke der Natur*,mit einer Vorrede von Herrn A.F.W.Sack, zweite etwas vermehrte Auflage,Berlin 1750.

Sulzer,J.G.:*Unterredungen über die Schönheit der Natur,nebst derselben moralischen Betrachtungen über besondere Gegenstände der Naturlehre*, 2.Aufl.,Berlin 1779.

Einige Nachrichten von dem Leben und den Schriften des Herrn Johann George Sulzer.In:Johann George Sulzers vermischte philosophische Schriften,zweiter Teil,Leipzig 1781.

Johann Georg Sulzer's Lebensbeschreibung. Aus der Handschrift abgedruckt,mit Anmerkungen von Metian,J.B.und Nicolai,F., Berlin/Stettin 1809.

Briefe der Schweizer Bodmer,Sulzer,Geßner. Aus Gleims literarischem Nachlasse,Hrsg.v. Körte,W.,Zürich 1804.

Hirzel,J.C.:*Hirzel an Gleim über Sulzer den Weltweisen*,Bd.1, Zürich und Winterthur 1779.

Morf,H.:Johann Georg Sulzer,Ein Lebensbild.In: Neujahrsblatt der Hilfsgesellschaft von Winterthur, Winterthur 1863.

Blätter für Handel,Gewerbe und sociales Leben,Beiblatt zur Magdeburgischen Zeitung, No.32,den 6.August 1877.（マクデブルク市・市文書史料室所蔵）

Johann Georg Sulzers Pädagogischen Schriften,mit Einleitung und Anmerkungen von Willibald Klinke,Zürich 1922.

Johann Joachim Spalding,Kritische Ausgabe,Bd.6 (2) ,Hrsg.v. Beutel, A. und Jersak,T.,Kleinere Schriften 2: Brief an Gleim, Lebensbeschreibung, Tübingen 2002.

Meid,V. (Hrsg.) :*Johann Jakob Bodmer,Johann Jakob Breitinger, Schriften zur Literatur*,Stuttgart 1980.

Bender,W.:*J.J. Bodmer und J.J. Breitinger*,Stuttgart 1973.

Weigelt,H. (Hrsg.) : *Johann Kaspar Lavater, Reisetagebücher*, Teil I - II,Göttingen 1997.

Weigelt,H.: *J.K. Lavater,Leben,Werk und Wirkung*,Göttingen 1991.

Johann Caspar Lavaters ausgewählte Werke,Bd.3-4,Hrsg.v.Staehelin, E.,Zürich 1943.

Hurlebusch,Rose-Maria:*Zum Briefwechsel zwischen Klopstock und Gleim*.In:Festschrift zur 250.Wiederkehr der Geburtstage von J.W.L.Gleim und M.G.Lichtwer,Hrsg v. Gleimhaus,Halberstadt, 1969.

Giering,K.:Lavater und der junge Pestalozzi.In:*Pestalozzi-Studien*, Bd. 3,Berlin/Leipzig 1932.

Förster,U.:*Unterricht und Erziehung an der Magdeburger Pädagogien zwischen 1775 und 1824*, Frankfurt a.M.1998.

Der Neue Weg,regionale Tageszeitungen, Hrsg.v. CDU, Halle und Magdeburg, 02.08.1991.

Volksstimme Magdeburg, regionale Tageszeitung, von der Magdeburger Verlags- und Druckhaus GmbH erschienen,11.11.1992.

Wiehle,M.:*Magdeburger Persönlichkeiten*,Hrsg.v. Magistrat der Stadt Magdeburg Kulturdezernat,Magdeburg 1993.

Leibniz,G.W.:*Philosophische Werke*,Hrsg.v.Buchenau,A./Cassirer,E., Bd.1, Leipzig 1924.

Wolff,Ch.:*Vernünftige Gedanken von den Absichten der natürlichen Dinge,den Liebhabern der Wahrheit*,dritte Auflage,Frankfurt/ Leipzig 1737.

Pestalozzi,J.H.:*Sämtliche Werke,Krit.Ausgabe*,Bd.1,Berlin 1927.

Liedtke,M.:*Johann Heinrich Pestalozzi*,Hamburg 1968.

Schneiders,W. (Hrsg.) :*Lexikon der Aufklärung, Deutschland und Europa*, München 1995.

Widmer,S.:*Illustrierte Geschichte der Schweiz*,2.Aufl.,Zürich 1971.

Weigl,E.:*Schauplätze der deutschen Aufklärung,Ein Städtrundgang*, Hamburg 1997. エンゲルハルト・ヴァイグル（三島憲一・宮田敦子訳）『啓蒙の都市周遊』岩波書店、1997年.

大津真作『啓蒙主義の辺境への旅』世界思想社、1986年.

成瀬 治『伝統と啓蒙 - 近世ドイツの思想と宗教』法政大学出版局、1988年.

J.H.ブラムフィット（清水幾太郎訳）『フランス啓蒙思想入門』理想社、2004年.

W.ドイル（福井憲彦訳）『アンシャン・レジーム』岩波書店、2004年.

ロイ・ポーター（見市雅俊訳）『啓蒙主義』岩波書店、2005年.